

第10章 現代モンゴル国における贈与

——ゲルとその部品のバイオグラフィーより

風戸真理

1 はじめに

本章は、モンゴル国における贈与の概要を示した上で、とりわけ親から子へ贈られるモノである移動式天幕「ゲル」が贈与・変工・部品交換・販売・処分されるプロセスを記述することをとおして、モンゴル社会における贈与と商品の関係を考察するとともに譲渡可能／不可能なモノのモンゴルの特質を検討することを目的とする。

本章では贈与を、自発的に、返礼を期待せずに、他者にモノを与える行為と定義する。交換との相違は、贈与は一方方向へ向かうモノの動きで、交換は双方向的である点である（伊藤一九九六、一頁）。日本の民法でも贈与は片務契約、交換は双務契約である。

マルセル・モースの『贈与論』によれば、アーカイックな社会（古代型社会）は、贈与の三つの義務（与える・受け取る・返礼する）から構成される互酬的な関係を基盤とした全体的給付制度として成り立つ（モース二〇〇九、三八頁）。モースの問いは、「受け取った贈り物に対して、その返礼を義務づける法的・経済的規制は何であるか。贈られた物に潜むどんな力が、受け取った人にその返礼をさせるのか」という点にあった（モース二〇〇九、一四頁）。モースはこれをハウという概念で説明しようとしたが、それを今村仁司は補足して次のように説明している。「ハウのなかには『譲りえないもの』の観念がある。人間（集団と個人）の人格と所有物は分離できない

いという意味で『譲りえない』のである」（今村二〇〇〇、一七二頁）。

では、アーカイックな社会における贈与と近現代社会における（商品）交換はどのような関係にあるのだろうか。近現代社会の理念は、人格とモノの完全な分離が生じ、完全なる私的所有体制と私的所有の権利が確立している、というものである（今村二〇〇〇、一七三頁）。ただし実際には、現代の多くの社会において、お金で買った商品が人格的なモノに変換されて贈与されていて、贈与は市場経済に埋めこまれている（伊藤一九九六、七頁、出口二〇〇一、四九―五〇頁）。さらにいえば、植民地主義やポスト植民地経験の後に世界市場と接続している諸社会においては、贈与と商品は画然と区別されているというよりも、さまざまな度合いで混じりあっているといえる（山崎一九九六、一八七頁）。

モンゴル国は社会主義による近代化という歴史的な経験を有し、一九九〇年代以降にはグローバルな市場経済の領域に包摂されている。ただし、モンゴルでは家畜は商品である一方で、文化的な意味が付与されて記号化されることもあり、商品化されたり個別化されたりしている（風戸二〇〇六、四八頁）。つまり、一つのモノが商品（譲渡可能）になったり、個別化されたり（譲渡不可能）と、状況によってモノの属性は変わるのであり、また、モノの移動に関わる意味づけも多層的であるといえる。

本章では、贈与と商品、譲渡不可能性と譲渡可能性という概念を用いて、モンゴルにおける贈与のあり方を解明したい。ここでは、譲渡（alienate）は人格面を含むモノの全体的な所属の移動を意味するものとする。なお、モンゴルには社会主義革命以前も現在も、モースが分析対象の中心にすえた競争的・非日常的な贈与のシステムは存在していない。

2 本章の課題

これまでのモンゴル研究では、日常的な贈与のあり方に関するまとまった記述がなかった。また、贈与のなかでも親から子に財、とりわけゲルが継承されるスタイルについては、一九四〇年代の内モンゴルを対象とした青木富太郎の論考があるが（青木一九五五）、現代モンゴル国の状況は不明である。

これらを課題として引きうけ、本章はまず、モンゴル国における贈与・返礼・負い目の概要を示す。次に、ゲルのバイオグラフィ（履歴）を記述することを通して、モンゴル社会における贈与／商品およびモノの譲渡可能性／不可能性のあり方を検討する。なお、モノに人間と同じようにバイオグラフィを認める研究手法は、イーゴル・コピトフが「モノの文化的バイオグラフィ・プロセスとしての商品化」のなかで提案したものである。彼は、モノが商品化されたり、個別化されたりすることは、社会的な相互行為が積み重ねられる時間的な経過のなかで、プロセスとして起きるものと指摘している（Kopytoff 1986: 69-70, 76）。

本章のもととなる調査は主に、モンゴル国アルハンガイ県チョロート郡（一九九七年五月～一九九九年四月。以下、チョロート郡と記す）、ホブド県ドート郡（二〇一二年八月～九月。以下、ドート郡と記す）および首都ウラ

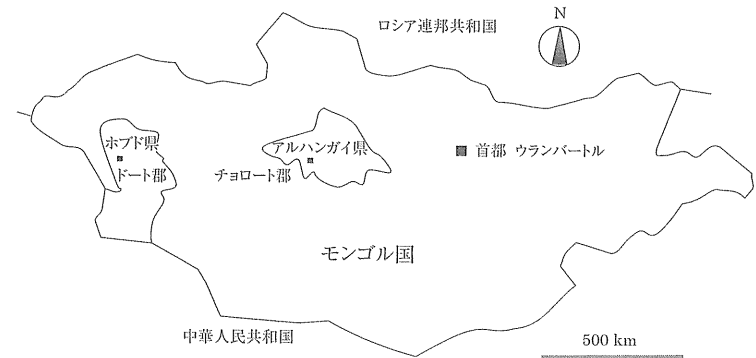


図1 調査地の地図

ンバートルのモンゴル国立大学（二〇一四年八月）でおこなった（図1）。主な調査方法は聞き取りであり、ドート郡では三〇代から六〇代の一六組の夫婦を中心にゲルの使用履歴をたずねた¹⁾。夫婦を一組として扱う場合の世代・年齢の表記には夫の年齢を用い、夫婦の名称としては夫の名前を用いて「夫の名前＋夫婦」と表記する。本章の構成は、続く第3節でモンゴルの贈与のあり方を概観し、第4節でゲルの贈与・使用・変工・部品交換のあり方を記述する。第5節では、生涯にわたって複数のゲルを入手して使用したり、販売・処分するあり方を検討する。第6節では、ゲルの部品と全体の関係を考察する。第7節では、モンゴルにおける贈与の特徴と、ゲルやその部品の譲渡可能性／不可能性について議論する。

3 モンゴルの贈与

アワフの三類型

本節では、モンゴルの草原における日常的な贈与のあり方を、チョロート郡での事例にもとづいて、受け手に注目しながら紹介する。他者にモノを「与える」という意味の動詞はモンゴル語で「ウグフ」(ugufu: 与える)であり、受け取ることを「アワフ」(awafu: 取る)という。ただし、受け手の行為の表現については、要求の有無や与え手との関係などによりバリエーションがみられる。ここでは、モンゴルの人びとがモノを受け取るあり方を三つの型に分けて記述する。

第一は、「要求に基づく分配」(demand sharing)である。これによって与えられるモノを受け取ることを「ゴイチ・アワフ」(guy awafu: 与えて取る)という。乞い手は相手に「〇〇はありますか」(baina uu?)という疑問文で、当該のモノをねだることが多い。両者の関係は親族や親しい隣人であり、ねだられるモノは酒や砂糖などに加え、自動車に乗せてもらうといったサービスがある。

第二に、親から子へのモノの贈与、継承があり、これは「ウブレン・アワフ」(*uulun awah*・継承して取る)と表現される。モンゴルでは財は主に生前に贈与される。贈り手は母・父の他に祖母・祖父であり、対象となるモノはゲル、銀の鞍や装身具、そして天然石や磁器の嗅ぎタバコ入れなどがある。

なお、家畜の継承はゲルや銀製品と同じではない。一般に、家畜の群れのまとまった一部を取ることを「マル・タスラチ・アワフ」(*mal tsalai awah*・家畜を分離して取る)というが、親から子への家畜群の贈与にもこの表現が用いられる。

第三は、社会関係のあるすべての人からの、自発的な意志による贈与である。その受け取りは、いわば、ただの「アワフ」である。受け取るものは「ベレク」(*balag*・贈り物)とよばれ、モノ・家畜・現金が含まれる。

とくに女性は、居住集団³⁾とともに構成していない他世帯を訪問する時には、原則として、ベレクを贈与する。ベレクの内容は、民族服「デル」の生地・衣類・スカートなどの布製品、飴やウエハースなどの菓子、小額紙幣などである。男性が同伴する時には酒(ビン入りのウォッカ)も加わる。都市に住む人びとが草原の親戚や知人を訪ねるさいにもベレクを贈る。そして帰りには、返礼として、布製品に対しては布製品、菓子には菓子が、一山に積まれて手渡される。返礼の品がみつからない場合には、紙幣が両手で手渡されることもある。このようなベレクの贈与と返礼の応酬は、自発的なものであり、また、その質や量は当事者にまかされているとはいえず、ほぼ定型化された儀礼的な贈答システムになっているといえるだろう。

次に家畜の受け取りについて述べる。モンゴルの地方に暮らす人びとは、人生のさまざまな段階で親や祖父母を含む年長の親族から家畜個体を贈与される。たとえば幼児期には、生まれて初めて髪を切る儀礼のさいに年長親族から家畜をベレクとして一頭ずつ与えられる。また、年長者が年少者に、また逆に若者が年長者に対して「喜ぶから」といって、人生儀礼や年中行事に関係なく、家畜をはじめとしてモノや現金をベレクとして与えることもある。

なお、ベレクのなかに、とくに「シャゲナル」(*shaghar*・ほうび)とよばれるカテゴリーがある。シャゲナルは、それまでに労働・サービスを提供した相手からサプライズとして与えられるベレクのことである。

最後に、「アワフ」とは表現されないが、モンゴル人の社会生活において重要な位置を占める贈与のひとつとして客迎へのご馳走、欲待の食物がある。他家を訪問して帰宅した者には、自宅にいた家族が「何で欲待し(てくれ)た?」と料理名をたずねる。

以上、受け手の視点に立つてモンゴルの草原における日常的な贈与を三つに分けて記述した。これらは相互に重なり合う部分もあるが、要求にもとづく分配、親から子への財の継承、それ以外の三つに分類できる。

返礼と負い目

次に、これら三つの受け取る行為にまつわる返礼や負い目について検討する。

第一の「要求にもとづく分配」に対しては、返礼はあまりなされない。店で買えるものを、買うことができないうちに親族などの近い関係のある相手に乞うているわけなので、返礼したくてもできない事情があるだろう。また、「ありがとう」などの言葉による表出的な財の返礼もない。このケースでは、物乞いの交渉プロセスおよびモノの分配をおして、要求する者・される者のあいだの関係の親密さが表現されているのだと考えられる。

ただし、受け手は乞うて取るのをできるだけ避けようとし、その代わりにつけて取る(「ゼールト・アワフ」(*zeelt awah*)「ことを提案する。受け手は、つけて取るという約束をしてモノを取るとメンツが保たれるようで、堂々としている。とはいえ筆者の知る範囲では、支払いは時間をかけて少しづつおこなわれ、半額ほどになった時に中断されることが多かった。モノをついで取ると、その場で一度、モノは贈与される。そして、受け手は返済する意志を見せ続けることで、受け手と与え手の役割が逆転して関係が継続するのである。

第二の「親から子への継承」では、子は親に直接に返礼することはない。ただし、親から継承したモノの処分

権については、これが受け取った者にあると考える者もいれば、そうでないと述べる者もいる。この点については後述する。

第三の「ベレク」には、さまざまな期間をあけて返礼がなされることが多い。短期の例としては、客の訪問にともなうベレクの贈答があげられる。モンゴルでは訪問者は一般に、数時間から数週間ほど他家に滞在して、去るが、その開始時と終了時にみられるベレクの贈答は互酬的である。長期の例としては、年長親族が子どもの成長儀礼を祝って家畜を贈与する場合があげられる。子どもへの贈与は、数十年の長期の時間幅をもった関係が構築される礎になっている。

最後に残るのはシャグナルであるが、これは、すでになされた行為に対する返礼という意味をもつベレクもある。草原では、牧畜作業の手伝いのために親族の子どもに来てもらい、数週間から数カ月間にわたって住みこみで働いてもらうことがある。この労働に対するお礼の金額や物品の内容は事前に相談されずに、事後にベレクとして与えられることが多い。

以上のように、モノの贈与は富の再分配の機能や、関係の構築・維持の機能を果たしていた。受け手にとっての負い目に注目すると、要求にもとづく分配には返済義務はないが、負い目が残るようであり、ついで取ることを提案することで負い目が回避されているように見えた。親から子への贈与では負い目はあまり表現されることがなかった。ベレクの返礼は、傾向として、短期返済型のものとして出世払い型のものに分けられた。

4 ゲルの贈与

結婚と新ゲル

この節では、贈与のなかでも「親から子へのモノの継承」、とりわけゲルの贈与に焦点を当てる。4節と5節が依拠するデータはドート郡での調査で得られたものである。

モンゴル人が一生のなかで最もたくさんモノを親族から贈与される機会は結婚時であろう。結婚にさいしては、ゲル・家畜・家財が新郎新婦に与えられる。新郎の親は息子たちにゲルと⁴⁾かま⁵⁾ (*ger suuks gal golomt*) を与え、このゲルを会場として結婚式をおこなう。新婦の親は娘たちのためにベッドやたんすなどの家具を与える。他の親族は絨毯やテレビ、DVDプレーヤーなどの家電、そして食器セットなどの家財用品を贈与する。

モンゴル語で「男女が結婚する」ことを表現する言い方の一つに「ゲルを立てる」(*ger barin*)があり、結婚する時に親から与えられるゲルを「シン・ゲル」(*shine ger*・新しいゲル)という。シン・ゲルは結婚式当日には結婚会場として客をもてなすのに使われ、翌日からは新婚夫婦の住居となる。モンゴルの居住単位は核家族であり、夫婦とその未婚の子がひとつの世帯をなす。

シン・ゲルは、新郎に親がいる限り、また、親に家畜がある限り、新郎の親が家畜を売って、そのお金で新品のゲルを購入して与えるものである。⁴⁾親たちは、ゲルのセットを一括して買うこともあれば、部品ごとに職人に製作を注文して何年もかけて少しずつ買い集め、さらにはフェルトを自作することもある。OBT(六〇歳)夫婦は、二〇一一年に結婚した末子TLGのために、ゲル一式のセットを合計約一〇〇万トゥグルク強(約六万五〇〇〇円)で購入した。ゲルは男性財である。

これに対して、ゲルの中に置く家具は原則として新婦の親が準備する女性財である。BHG(三八歳)の妻は結婚時に、ベッド・たんす・チャック式クローゼットなどの家具と、布団・衣類・食器などの家財を持参した。

なお、ゲルの構成は「骨組み」と「カバー類」とに二分される約二三種類の部品からなる。ゲルの「骨組み」は「木」(*nom*)とよばれ、木製品である「トローノ」(天窓)・「オニ」(天井)・「ハナ」(壁)・「バガナ」(柱)・「ハーガ」(ドア)の四つからなる。「カバー類」の主なものは、「デーベル」(天井のフェルト)・「トローラガ」(壁のフェルト)・「ウルフ」(天窓のフェルト)・「ブレース」(木綿のカバー)・「ツォワク」(内装としての天井の化粧布)・「ホシ

ク」(内装としての壁の化粧布)、網などである(風戸二〇一五、一一九頁)。

ゲルの変工

調査時点で人びとが住んでいるゲルは必ずしもシン・ゲルのままではなかった。人びとが結婚時のゲルに対して最初に加えた変更状況を調べたところ、結婚時のままのゲルに住んでいたのは一六組中一組の夫婦のみであり、九組(五六・三パーセント)がゲルを「縮小」していた(六組は不明)。ゲルは組み立て式で、部品を入れ替えたり切ったり、挿入したりすることによって、そのサイズを調整することができる。さらにいえば、ゲルを縮小した九組のうち四組(全体の二五パーセント)は、別の小さいゲルに住み替えており、別の四組(二五パーセント)は親が立ててくれたシン・ゲルの骨組みを切ってサイズを縮小して利用していた。残り一組は骨組みを切らずにサイズを縮小していた。

このようにゲルは縮小されることが多いが、その理由は次の三つである。第一に部品の破損・摩耗・疲労である。第二に移動や暖房など生活コストの低減、第三に風への耐性を上げること、がある。第一の、破損や摩耗した部品を切り落として、丈夫な部分を残して使用するための縮小は納得しやすいが、第二・第三のような積極的な理由でゲルを縮小する必要がある場合は、別のゲルに住み替えるという方法があるのではないだろうか。

筆者は、二〇一四年八月に筆者はモンゴル国立大学社会科学部の人類学・考古学教室の学生三八人を対象として、ゲルについての講演をおこない、先の調査結果を紹介した。すると学生たち(ほとんどが地方出身)は、「うちでは切りません」「親や先祖から相続したものは大切にします」と元氣よく反論した。

この議論以前に筆者は、ゲルの部品を切断することについて、ドート郡の人びとに次のような質問をおこなっていた。「親からもらったものを切つてよいですか」「部品を切つたら戻らないけれど、よいですか」などである。これらに対する答えは、「必要のためなら切る」「もらったものは自分のものだから親は関係ない」などであった。

学生とドートの人びとの見解を比較すると、学生は十代であり、自立した住生活を経験したことがない。このため、親から贈与されたものは譲渡不可能であるというモースの説に通じる理念を強調した。一方、すでに結婚して生活の必要に直面したドート郡の既婚者たちはより現実的で経済合理的な選択をしたと考えられる。

結婚時と調査時点のゲル

次に、調査時点で人びとが居住していたゲルの由来を調べた。その由来が明らかになった一二世帯のうち、結婚時のシン・ゲルに住み続けている夫婦は二組(二六・七パーセント)だけであり、四組(三三・三パーセント)が父母や祖父父母が使っていたゲルを中古の状態で継承したものに住んでおり、さらには、半数にあたる六組の夫婦は自身で購入したゲルに住んでいた。つまり、人びとはシン・ゲルで新生活を始めた後、さらに父母から中古のゲルをもらったり、父母や祖父父母が亡くなった後にそのゲルを継承したり、自身でゲルを買増したりしていたのである。

では、ドート郡の人びとは一生のあいだにどのくらいの数のゲルをもらったり、買ったり、与えたりしているのだろうか。三〇代から六〇代までの八組の夫婦が調査時点までに所有したゲルの数を調査したところ、四〇歳までの若い夫婦三組は二個、四〇代半ば〜五〇代の夫婦三組は三個、六〇代の年長夫婦二組は三個のゲルに加えて、郡や県の中心地に木造住宅をも所有していた。このように、人びとは複数のゲルや住居を所有しながら、これを子や孫に与えたり、季節や行事に合わせて複数のゲルを使い分けたりしているのである。

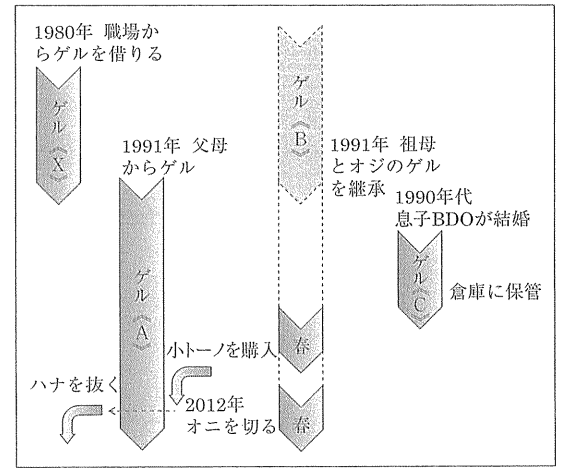


図2 複数のゲルの使用と所有：BSR（53歳）

ゲル使用の具体例を示す。

《事例1》 BSR（五三歳、男性） これまでに三つのゲルを所有、一つのゲルを借用（図2）

BSRは一九八〇年にウランバートルで結婚し、職場が所有する中古のゲルを借りて入居した（ゲル《X》）。ところが一九九一年、国家の体制転換にともないBSRは失業し、故郷のドート郡に戻った。この時、BSRの父母が六枚ハナ(5)のゲルを立ててくれた（ゲル《A》）。

同年、BSRの父方祖母が亡くなった。祖母のゲルは四枚ハナの小さなゲルで、そこにBSRの亡き父の弟（オジ、四五歳）と同居していたが、オジは、一人になって日常生活ができなくなってしまった。そこで、BSRはオジをその四枚ハナの小ゲル（ゲル《B》）とともに引き取った。オジは小ゲルをたたみ、BSRのゲル《A》に同居を始めた。

一九九〇年代にBSRの息子BDOが結婚した。BSRは新しいゲル（ゲル《C》）を買って立て、息子に与えた。しかし、結婚後ほどなくしてBDOはゲル《C》を使わなくなり、郡の中心地にある倉庫に片づけ、BDOの妻の父のゲルに同居し始めた。

二〇一二年春、BSRはゲル《A》のオニを切り、ハナを抜き、小さいトノを購入してゲル全体を小さくし、現在までこの小ゲルに住んでいる（ゲル《A》）。一方、ゲル《B》を、夏には倉庫に保管し、春に出して立て、生まれたばかりの当歳ヒツジを囲い入れる仔畜舎として使っている。ゲル《B》は六〇年前から使われてきた古いものである。

BSR夫婦は合計三つのゲルに居住し、一つのゲルを借用し、三つのゲルを所有し、一つを贈与している。このように、人びとは一生のあいだに複数のゲルを所有・使用している。また、一年のサイクルで見れば、複数のゲルを季節と目的に応じて使い分けているのである。(6)

ゲル併用の実態

複数のゲルの併用と使い分けはどのようにおこなわれているのだろうか。調査時点で人びとが居住していたゲルの由来は、前節で述べたとおり、結婚時のもの、父母や祖父母が使っていたもの、自身で購入したもの、の三つであったが、実際のゲル利用においては二つ以上のゲルが同時期に併用されるのに加えて、複数のゲルのあいだで部品が入れ替えられることがあった。ゲルはいたむので絶えず補修が必要であるが、部品の新調は少しずつ

5 生涯にわたるゲル使用

複数のゲルを所有する

本節では、生涯にわたるゲルの使用のあり方を示していく。人はゲルを一生に複数、所有するが、その使途は大きく三つに分けられる。すなわち、①メインの住居にするための大ゲル、②オトル（頻繁に移動しながら家畜を肥育すること）に使う小ゲル、③春に仔畜舎として使う小ゲル、である。メインの大ゲルとオトルの小ゲルは、人間が居住し、生活にも客間にも使用するものなので、頑丈で、安全で、整備されている必要がある。これに対して仔畜用の小ゲルは天井にトノがなくてフェルトとビニールを張っただけの簡易なものもあるということであった。

以下に、人生において複数のゲルを所有してきた夫婦による

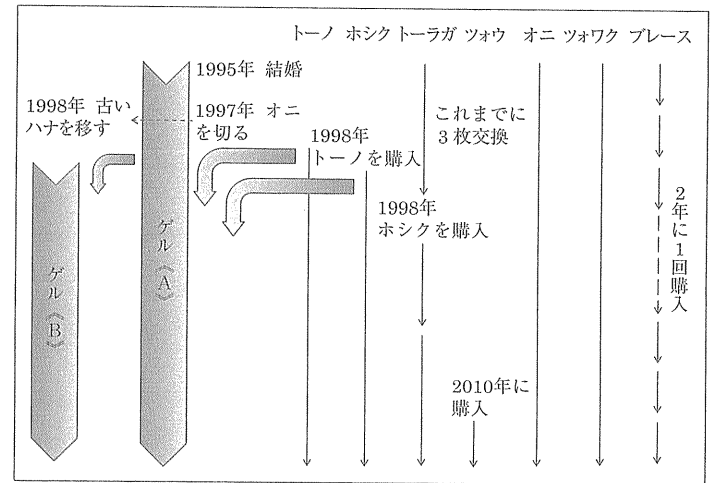


図3 ミクロなゲル利用と部品交換：EEK (40歳)

おこなわれ、いたんだ部品は保管されたり、古いゲルに転用されたりすることが多いためである。

以下では、複数のゲルの利用と部品交換のあり方を、結婚時のものを補修しながら利用してきた例(事例2)、父母や祖父母が使っていたものを継承した例(事例3)、自身でゲルを新規に購入した例(事例4)の順に示す。

《事例2》EEK(四〇歳、男性) 結婚時のゲルを補修しながら居住(図3)

EEKは一九九五年に結婚したが、その時、親が家畜を売却して七枚ハナの大ゲルを立ててくれた(ゲル《A》)。ところが一九九七年、EEKはそのゲルのオニを切り、ハナを一枚を外して六枚ハナのゲルへと縮小した(ゲル《A》)。一九九八年、トノが摩耗して傾くようになったので、新しいトノを購入した。いたんだトノは郡の中心地の倉庫にしまつてある。

同年、《A》から外したハナを利用し、他の部品も買いそろえて、春用の仔畜舎と秋用のオトルのゲルを兼ねた小ゲル《B》を立てた。今に至るまで《A》を住居、《B》を畜舎もしくはオトルのゲルとして使っている。

ゲル《A》に対しては毎年秋に補修をおこない、ほとんどの部品を保持してきた。まず骨組みのオニは、切つ

て短縮したものの、結婚時のものを毎年ペンキで塗り直してきた。カバー類では、ツオワクを毎年洗い、ブレースを二年に一回交換してきた。トーラガは裾が砂利や雨でいたむために、結婚してからこれまでに三回交換した。買い増したものとしては、一九九八年にホシクを購入して取り付け、これを毎年洗ってきた。また、二〇一〇年に、デーベルを雨から守るためのツォウ(ビニール・シート)を買い足した。

EEKのシン・ゲルは、骨組みが切られて縮小され、一部の部品が交換されたものの、結婚時の主な骨組みとフェルトが現在にいたるまで一七年間使われているのである。

《事例3》BSH(三三歳、男性) 祖父母が住んでいたゲルを継承して居住

BSHは一九九八年に結婚し、この時に親が立ててくれた大ゲル(ゲル《A》)に一年と少し住んだ。二〇〇〇年、父方祖父が八〇歳を過ぎて亡くなったため、祖父の小さい四枚ハナの小ゲル(ゲル《B》)を継承して移り住んだ。この小ゲルはいたんでいたんで、大ゲルのハナとハールガを入れて交換した。また、ツォウやブレースは一〜三年ごとに新調している。

BSHもEEKと同様に、シン・ゲルには二年と住まずに小さいゲルに移っている。そのきっかけは、BSHの場合、父方祖父が亡くなり、そのゲルを相続したことである。祖父のゲルのトノは四〇〜五〇年経ったものであるというが、ゲル《B》の構成は、新旧の多様な部品の折衷となっている。

《事例4》MHJ(五八歳、男性) 自身でゲルを購入して居住(図4)

MHJは、一九七八年に結婚して親がシン・ゲル(ゲル《A》)を立ててくれたが、「結婚時のゲルは悪くなっ

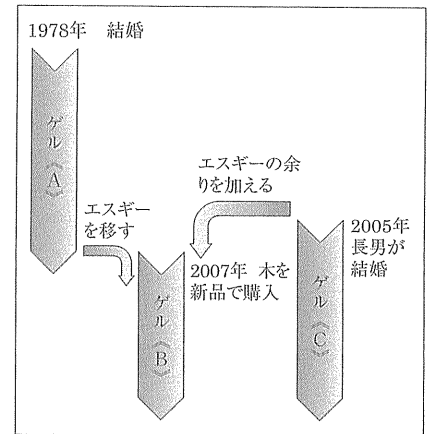


図4 ミクロなゲル利用と部品交換：MHJ (58歳)

フェルトが残っており、調査時点で住んでいたゲル《B》にこれが使われているためである。ゲルの部品は大きく「骨組み」と「カバー類」に分けられるが、ゲルの本質が骨組みにあると考えればMHJの結婚時のゲルは捨てられたといえるが、フェルトが残っていることを重視すれば、そのゲルは継続しているともいえる。

以上から、ゲルの部品は少しずつ交換されており、また、一つの家族が併用している複数のゲルの間では部品が相互に入れ替えられていることがわかった。ゲルを住み替える時にも、新しい部品を購入するだけでなく、古いゲルの部品を再利用するため、新旧折衷の部品からなるゲルが立てられていた。

ゲルの入手・処分・販売

ここではゲルを入手する方法とゲルを手放す方法について述べる。

ゲルの入手方法には二つある。第一に、親が息子に贈与するため、既製品の新品ゲル・セットを市場で購入し

たり、部品を職人に注文し、製作してもらう。第二に、既婚の夫婦が自身のために二つめ、三つめのゲルを求めて市場で購入するものである。この時には新品と中古品の両方が選択肢となる。

他方で、ゲルを手放す方法は三つある。第一に、親が子どものために買ったものを、子に贈与するものである。第二に、さまざまな事情で使わなくなったゲルを倉庫に保管しているうちに、親や子などの近親者からの要求に応じて贈与したり、地域の人に乞われて中古で販売したり、口コミやインターネット上で広告を出したりするのである。第三は廃棄処分である。古いゲルの骨組みがどうにも使えなくなった場合にはこれを戸外で燃やすと人びとは言う。

モンゴルでは火に聖性が付与されている。調理のさいには肉の一片を、酒を飲むさいにはその一杯目をかまどの火に捧げる習慣がある。これらには、生産物など一番よい部分 (*avei*) を「天」(*tenger*) に捧げるという意味がある。古いゲルの部品を燃やすのは、家族の歴史が刻み込まれて人格的なモノとなったゲルの部品を、火で破壊して天に送るためと解釈できる。

他方で、まだ使えるゲルを手放す時には、中古市場に売り出すことがある。たとえば、インターネット市場「Uneguin」には二〇一五年七月二四日の時点でゲルの販売広告が七つ出していた。サイズは、五枚ハナのもものが四点、四枚ハナのもものが二点、不明が一点である。商品の構成は、骨組みのみ、カバー付き、フェルトも付くもの、さらに家具付きのものまで多様である。提示価格は五〇万トゥグルク (約三万円) から一二〇万トゥグルク (約六万五〇〇〇円) であった。

ゲル売却の背景には、社会主義期から現在にいたるまでのモンゴルの都市化が関係していると考えられる。草原から都市に移住した人びとは最初、ゲルを持ちこんでゲル地区に住むが、やがて通勤・通学の便を考えて、より中心部に近い集合住宅地区にコンクリート製のアパートを買う。その時にゲルが不要になるので、売りに出すのだと考えられる。

て捨てた」「木を交換した」という。二〇〇七年に四・五枚ハナの小ゲルを木のみ新品で購入し(ゲル《B》)、フェルトだけ結婚時のものを使っている。また、長男に与えるためのシン・ゲル(ゲル《C》)のトौरガ(壁のフェルト)が三メートル分余ったので、これを自身の小ゲル(ゲル《B》)に加えた。

MHJは結婚して三四年を経た、五八歳になる年長者である。彼の結婚時のゲルの骨組みは、小ゲルにも使えないほどに劣化が進んでいた。彼は結婚時のゲル《A》を「捨てた」と言ったが、筆者が聞き直すと、「木を交換した」と言い変えた。結婚時の

彼らは、ゲルを廃棄する時にはわざわざ焼却するという。にもかかわらず、中古市場で販売する時にはしごくあっさりとしてゲルを他者に譲渡する。これらの相反するかに見える二つの態度にはどのような背景があるのだろうか。一つには市場交換の力があるだろう。ゲルに価格をつけて現金その他と等価交換することで、ゲルの人格性が捨象されて譲渡可能物となったのだと考えることができる。二つめに、モンゴル人の両義性、つまり、複数の理念のあいだをスイッチしながら行動する傾向があげられる。

ただし、住宅の販売は必ずしも完全な譲渡にならず、現金で購入した中古住宅に人格がついていたという例がある。ゲルでなくて木造住宅ではあるが、中古住宅を買った家族の子が難病を発症し、近代医学で治療できなかったので僧侶に相談したところ、「かまどが合わない」といわれた。そこで、作りつけのかまどのついたその住宅を転売してゲルに戻ったところ、子も治癒したという。このように、ゲルや住居には、家族生活の歴史が刻み込まれるため、人格的なものが付帯しやすいのだといえる。

モンゴルの人びとは、一方で、機能が失われるほどに使い込んだゲルの部品を、他者に勝手に利用されるのを避けるために丁寧な焼却処分する。他方で、市場における等価交換のシステムという近代的な理念を優先することと、使い込んできたゲルの人格性を捨象し、単なるモノとして他者に譲渡する。これらは、モンゴルの人びとにとってのゲルとのつきあいかたの理念的な両極であり、彼らのゲルとのつきあい方のリアリティーは、これらの間に位置づけられるのだと考えられる。

6 ゲルの部品と全体

本節では、ゲルの部品と全体の関係を議論する。

シン・ゲルはその言葉の意味(新しいゲル)どおり原則として新品で、親から息子への贈与物であるが、摩耗対してためらいなく不可逆な変工を加える。(2) 変工には贈与者の介入はない。(3) 複数のゲルの部品は入れ替えられる。(4) ゲルの部品は不要になれば焼却処分される。(5) 中古市場に売りに出されることもある。

他方で、一部の部品がその使用プロセスのなかで長持ちし、品質がよいとわかったり、家族の生活と長い年月をともしること、売らないモノ、そして子や孫だけに与えるモノに転換することがあった。TGT(六〇代、男性)が調査時点で住んでいたゲルのトローノは、彼の妻の父親から譲られたものであったが、これを「五〇年以上経っている。彼の歴史的なトローノは品質がよいし、家系を伝わってきたものなので売ってはいけない。子どもに与える」と話した。このように、長持ちした部品は個別化され、家族の連続性の象徴になっているのだといえる。

ゲルの部品は消耗品であり、その寿命は部品ごとに異なり、また同種の部品にも個体差がある。このため、ひとつのゲルは、入手経路の異なる複数の部品が組み合わされて構成されることが多い。実際に、結婚後数年が経過したゲルや、二つめ以降のゲルは、部品がほぼ寄せ集めである。

ゲルの部品と全体については二つの見方があった。一つめは、ゲルの部品を交換してもそれを同じゲルとみなすような、部分の入れ替わりを越えた全体への同一視である。プリコラージュ的なモノであるゲルの、その全体に継続性が付帯するという見方である。二つめに、一部の部品が異なれば、全体を別のゲルとみなす見方である。注目したいのは、これらのはつきりと区別されるのではなく、混じりあっている点である。たとえば、父母からもらったゲルを「捨てた」と言ったり、やはり部品が現在のゲルに組みこまれていることにかんがみて「骨組みを交換した」と言ったりと、状況に応じて表現を調整するような揺れがみられるのである。

一つめにあげた同一視、連続視の背景には、モンゴルの人びとが個々の部品を個別のものとして認識しており、

これらの交換過程を明瞭に記憶していることがあるだろう。筆者は別稿で、モンゴルにおいて、個体識別されたウマとの交換で入手された別のウマが、最初のウマの家系に位置づけて認識された例を記述している（風戸二〇〇六、四三頁）。ゲル部品の個体識別と交換過程の記憶は、家畜のそれとパレルであるとみなすことができる。そのことによって、古い部品と交換して入れた新しい部品を過去の部品と同一視することが可能となり、ゲル全体に対する連続した履歴を認める態度となるのだと考えられる。

ところで、これまでゲルの部品のことを日本語で「ゲル+の+部品」と表現してきた。しかし民俗概念では、ゲルの部品は「骨組み」(wood)や「カパー類」(burras)というカテゴリーに分けられるほかは、個別の名前でよばれる。つまり、各部品は単体で存在しうるのである。たとえば家畜を例にあげると、モンゴルにはホニ(ヒツジ)という総称があり、ホニはホルガ(当歳仔ヒツジ)やトゥルク(二歳ヒツジ)などからなるが、ホルガは独立で存在しうる。同様に、トーノやオニは、「ゲルのトーノ」「ゲルのオニ」と説明しなくても、また、ゲルの全体が存在しなくてもトーノやオニとして存在しうるのである。

ゲルの処分も、実際には、個々の部品の処分である。ゲル全体が古びて、ゲルの全体を捨てるのではなく、部品がそれぞれの品質や使われ方に応じて個別の速度で劣化するのに応じて、異なるタイミングで処分されるのである。骨組みは毎年ペンキを塗り替えられて何年も使用されるが、カパーは太陽に焼けたら家畜に破かれたりするため一二年ごとに買い換えられる。布類は年に二回も洗濯する世帯があれば、あまり洗わない世帯もある。そしてトーノやドアなどの大きな加重がかかる部品は、使っているうちにその部品の品質(耐久性)が個体差として現れるという。

7 おわりに

モンゴルの世俗生活ではモノの蓄積は重要ではない。モンゴルの宗教的世界観はチベット仏教に支えられている部分が多い。仏教は、「いまここ」での返礼を期待しない、来世志向を特徴とし、モノの譲渡可能性の観念が比較的強い社会の形成を支える(山崎一九九六、一八八頁)。現代モンゴル国に生きる人びとの人生観には社会主義の影響も大きいだろう。ウランバートル在住の四〇代男性は、「財を蓄積することには意味がない。財は労働を投下する手段として必要だ」と自身の生活実践を支える経済・労働観を語った。

とはいえ、生活にはモノが必要である。たとえば、要求にもとづく分配ではモノそのものが重要で、富の再分配の機能を果たしている。ただし、物乞いの対象は主に酒や砂糖などの嗜好品であり、人びとは物乞いしては断られることをくり返す相互行為にも価値をおいているようであった。一方、訪問時のベレクの贈答では、ほとんど同じモノがお返しされていた。モノの贈与において重要なのは、その物質的な質量そのものではなく、モノを通して構築され、維持される社会関係なのであると考えられる。

モンゴルの人びとは日々モノを与え、受け取り、お返ししている。その原動力はどこから来ているのか。今村は贈与行為、返礼行為は人間の存在にかかわる根源的な負い目感情によるものであると述べている。人間は生命を与えられ、この世に加わった。このため、命という巨大な贈与に対する根源的な負い目を負っている。命の贈与は超越者からのものであるが、間接的には先祖からのものである(今村二〇〇〇、六六一六七頁)。贈与とそれを支える負い目の原点は超越者からの命の贈与であることは、モンゴルの贈与にもあてはまるだろう。

そして、親が子にもっとも多くのモノを一時に与える機会が、結婚にともなう財の分与であり、結婚式で親から子へ贈与される財の象徴がシン・ゲルである。これは実用品であり、消耗品であるが、長期にわたって使用され、子や孫に継承された部品が家宝のような扱いを受けることがある。

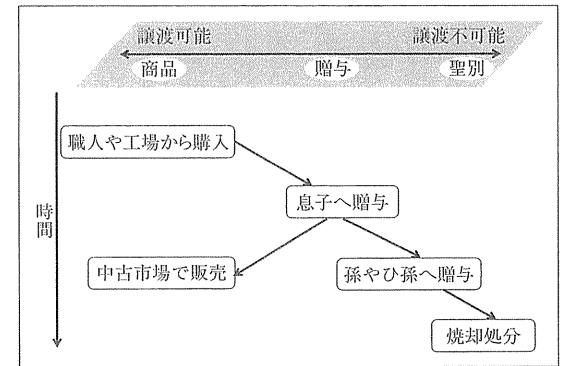


図5 ゲルのバイオグラフィー

ゲルのバイオグラフィーを図5にまとめた。ゲルは職人や工場が生産し、親がこれを商品として購入し、親から息子へ贈与される。ゲルは使われ、メンテナンスされて、あるものはさらに孫やひ孫に贈与され、あるものは中古市場で販売される。この過程で、時間の経過とともに、ゲルの使用者とゲルの関係深度も深まっていく。そして、すべてのゲル、あるいはその部品は最後に捨てられる。そのさいに火で燃やすことは、破壊すること、つまり聖別＝供儀するということと考えられるだろう。家族生活の痕跡が刻まれたゲル（の部品）は、自身の手で聖なる火によって破壊し、人間界から超自然的世界＝「天」へ送るのがよいと考えられているのである。

世代を越えて継承されてきた部品はその歴史性ゆえに他者には売らず、子どもや孫だけに与え、壊れたら燃やすと言われていた。このような部品は、家族の歴史の記号として個別化されているのである。アネット・ワイナーはファイジーの布を例として「古い布は過去の歴史の関係を伝え運び、布そのものを過去の権威を現在にもたらず物質上の記録保管所（アーカイブ）にしている」と述べている（ワイナー一九九五（一九八九）、八八頁）。ファイジーの布は儀礼時のみ用いられる象徴財・希少財であり、日常生活用品であるゲルとは性格が異なるが、ゲルも数十年のあいだに家族の日常生活の「歴史」を担っているといえるだろう。

モーリス・ゴドリエは、すべての人間社会には二つの領域、すなわち、交換や贈与交換を含む「交換の領域」と、個人や集団が自分たちのために大切に「保持」し、それを子孫やアイデンティティを一にする者に「伝えてゆく領域」があると指摘している。なお、「保持されるモノ」にあたるのは、その社会の世界観のなかで係留点

となる聖物であるとされる（ゴドリエ二〇〇〇（一九九六）、二八一―二八三頁）。ここでいう「交換の領域」は譲渡可能性の領域、「伝えてゆく領域」は譲渡不可能性の領域と言い換えられるだろう。

多くのゲルは「交換の領域」にあるが、少数の長持ちしたゲルの部品は「伝えてゆく領域」に入ったり、焼却処分されることで究極の譲渡不可能性を獲得したりする（図5）。ただし、ゲルは「伝えてゆく領域」に入っても、ゴドリエのいう意味での「聖物」にはならない。また、ゲルの木製部品の耐久年数はせいぜい数十年であり、集団のアイデンティティの係留点となるには物理的に脆弱である。それでもゲルは商品・贈与・譲渡不可能な諸領域のあいだを時間とともに移動していく。

以上に述べたゲルのバイオグラフィーをまとめると次のようになる。ゲルは商品として生産され、親から息子へと贈与され、そして、部品が変工されたり交換されたりしながら日常生活用品として使用され、ときには売られることもあり、最後には焼却処分される。そのなかで、ゲルを構成する個々の部品はそれぞれに贈与と交換の領域、譲渡可能な領域と譲渡不可能な領域のあいだを転移し、最終的には供儀される。

モンゴルのゲルのバイオグラフィーの記述と分析から、次の二点が明らかになった。第一に、これまでの研究で、贈与と商品とは混じりあい、譲渡可能性と譲渡不可能性はもつれあっていると指摘されてきたが（伊藤一九九六、山崎一九九六、出口二〇〇二）、モンゴルのゲルも同様に、贈与と商品のあいだを行き来していた。第二に、従来の研究では、社会の係留点として譲渡不可能なモノになるのは聖物であるといわれてきた。これに対して本論は、日常生活用品であるゲルやその部品も、たとえ短くはあっても家族の二―三代の歴史の記号となり、譲渡不可能な領域に配置されることを明らかにした。親や祖父母から贈与されたゲルとその部品は、日常生活用品でありながらも「小規模な歴史」を後世に伝えてゆく役割を担う場合があるのである。

（付記）本研究は、JSPS科研費90452292「生産現場における人とモノの関係性みる社会主義経験の多様性と普遍性」（研究代表：風戸真理、平成二三年度―平成二六年度（若手B）の助成を受けたものです。

註

- (1) 調査時点で、一六組中一五組は草原でゲルに住んで牧畜を営み、一組は郡の中心地でゲルに住みながら賃金労働をしていた。
- (2) 聖なるものへの贈与はこの限りでない。
- (3) 居住集団とは、草原で複数の世帯が近接してゲルを立て、家畜管理などの作業を共同でおこなう、季節的に構成される集団である。近年は、世帯あたりの所有家畜頭数の増加などを背景に、集団をなすに一世帯だけでキャンプすることも多い。
- (4) 孤児などの場合は、本人がお金をためて購入したり、親戚の援助を受けることがある。末子は親の使っていたゲルを相続するが、その詳細については今後の課題としたい。
- (5) ゲルのサイズはハナ(壁)の枚数で表される。ゲルのサイズの詳細については別稿を参照されたい(風戸二〇一五)。
- (6) 本調査がおこなわれたのが秋であったため、オトルの小ゲルに住んでいる人が多めであった。これとは別に、冬から春に住むための大ゲルや、春の仔畜用の小ゲルを合わせて所持している人が多かった。

引用・参照文献

青木富太郎 一九五五「内蒙古ハルハ右翼旗における相続制度」『ユーラシア学会研究報告 遊牧民族研究』2、九九―一一八頁。
 伊藤幹治 一九九六「贈与と交換の今日的課題」井上俊他編『贈与と市場の社会学』一―三二頁、東京、岩波書店。
 今村仁司 二〇〇〇「交易する人間 贈与と交換の人間学」東京、講談社。
 風戸真理 二〇〇六「商品世界からこぼれ出る家畜——社会主義期および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味」『人文學報』93、二五―五五頁。
 二〇一五「時空を超えて暮らしを包む住居——モンゴル・ゲルのフレキシビリティ」『世界の手触り フィールド哲学入門』、一〇九―一二七頁、京都、ナカニシヤ出版。
 ゴドリエ、モリス 二〇〇〇(一九九六)『贈与の謎』東京、法政大学出版局。
 出口顕 二〇〇一『臓器は「商品」か』東京、講談社。
 モース、マルセル 二〇〇九『贈与論』吉田禎吾・江川順一訳、東京、ちくま書店。
 ワイナー、アネット 一九九五(一九八九)「なぜ布なのか? オセアニアにおける富、ジェンダー、および権力」アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュナイダー編、佐野敏行訳『布と人間』六一―一八頁、東京、ドメス出版。
 山崎カラル 一九九六「Overview 贈与と交換から商品交換へ」井上俊他編『贈与と市場の社会学』一七九―一九四頁、東京、岩波書店。
 Kopytoff, Igor (1986) The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In Appadurai, Arjun(ed.) *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Uregui, mm (2015) *Internet, 24th July 2015*, <http://www.unegui.mn>

[編者] 岸上伸啓 (きしがみ のぶひろ)

国立民族学博物館・教授、博士(文学)、マッギル大学人類学部博士課程中退、専門は文化人類学で、カナダ・イヌイットの食物分配や社会変化、都市イヌイットの生活、北アメリカ先住民の捕鯨文化について研究。著書や編著書に『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』(2007年、世界思想社)や『捕鯨の文化人類学』(2012年、成山堂書店)、『クジラとともに生きる アラスカ先住民の現在』(2014年、臨川書店)などがある。

贈与論再考

人間はなぜ他者に与えるのか

二〇一六年七月三十一日 初版発行

編者 岸上伸啓
 発行者 片岡敦
 製本印刷 亜細亜印刷株式会社

606-3204 京都市左京区田中下柳町八番地
 発行所 株式会社 臨川書店
 電話(左) 〇七二一七一一
 郵便振替 〇二七〇一七八〇〇

落丁本・乱丁本はお取替えいたしません
 定価はカバーに表示してあります

ISBN 978-4-653-04318-8 C0039 ©岸上伸啓 2016

JCOPY (社)出版者著作権管理機構 委託出版物

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは著作権法違反です。